

二十四節気・季節の変化を楽しみませんか。

二十四節気は春夏秋冬を6つに、1年を24等分したもので、それぞれに季節の変化を表現する名がつけられています。私たちは季節の移ろいの中で暮らしていますが、二十四節気はまさに現代にも通じる暮らしの知恵です。忙しい毎日だったり、同じような毎日を過ごしていても自然の変化を意識するだけで心が落ち着いたり、視界が鮮やかになったりします。日本の伝統を楽しむことで、日々の生活に彩りを添えることができるでしょう。

6月は国民の祝日がない、一年を通して珍しい月です。

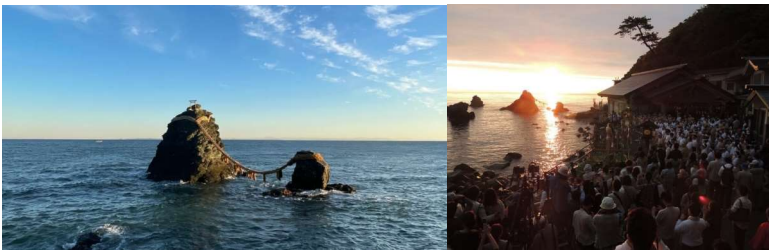
**6月21日は「夏至（げし）」。** 一年のなかで最も昼の長い日です。

2024年6月21日の横浜の昼の時間は約14時間34分です。

日の出：4時26分 日の入り：19時00分

「夏至」の日は「日の出が最も早く、日の入りが最も遅い日」、だと思いませんか？  
実は横浜の日の出が最も早い日は、夏至より1週間ほど早く、日の入りが最も遅い日は夏至より1週間ほどあとになります。

＜日本の夏至祭り＞といえば、二見興玉神社（ふたみおきたまじんじゃ／三重県伊勢市）で行われる「夏至祭」が有名です。伊勢神宮に祀られる天照大御神を讃える行事であり、夏至の日に二見浦で夫婦岩の間から昇る朝日を浴びながら禊を行います。



＜夏至に食べられるもの＞としては氷に見立てた水無月(みなづき)という和菓子。神事「夏越の祓(なごしのはらえ)」に合わせて京都を中心に食べられるもので一年の折り返し地点となる6月30日に食べ残り半年の無病息災を願うそうです。三角形の白いういろくに、ふっくら炊いた小豆をのせた伝統的な歳時菓子です。小豆には厄除けの意味があり、三角形の形は暑気を払う氷をあらわしています。



＜季節の有名俳句＞も沢山あります。

『田一枚植えて立ち去る柳かな』 松尾芭蕉

芭蕉は旅をしながら歌を詠んだ西行法師にあこがれていたようで、この句の解釈のひとつです。西行法師もひとやすみをするため立ち寄ったとされる柳の木を見た感動から、「柳を見て西行法師に思いを馳せていたら農民たちが田んぼに稲を植え終わっていた。田植えが終わり、私も農民たちも立ち去ったので残るのは柳のみだ」という解釈です。

奥の細道の名勝地、芦野の里 遊行柳(ゆぎょう)



＜芦野の里の田植え祭り＞

